
One more glass of Red wine

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One more glass of Red wine

【Nコード】

N0431E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

洒落たレストランで別れ話をする男女。切ないそのやり取りの結末は。チェッカーズシリーズ第二十七弾。後期のチェッカーズを代表する曲です。

第一章

d wine One more glass of Re

洒落た都会のレストラン。そこにいるのは二人の若い男女。二人共正装で白いテーブルに向かい合って座っている。既に料理も食べ終えグラスを傾けて話をしている。

「それが結論なんだな」

「・・・・・・ええ」

女が先に答える。彼女は俯いている。その前には空のグラスがある。紅いワインが底に微かに残っている以外は中には何も無い。ガラスにキャンドルの弱い光が照らされている。それが薄暗い店の中の僅かな光になっていた。だが彼女はそれを見ずに話をするのだった。

「同じだと思うけれど」

「ああ」

男はその言葉に頷く。彼はグラスを手にはしていた。そこには紅いワインがある。しかしそれを見ずに口もつけずに彼女の言葉を聞いているだけだった。

「そうさ。もう隠さないさ」

「やっぱり」

「言い訳になるけれどな」

彼はそれでも言った。

「こうなるとは思わなかったんだ」

「そうだったの」

「遊びだったんだ」

言い訳じみていた。言い訳はしなないと言っても。

「その遊びがな。こうなっちまうなんて」

「そうね」

女は俯いたままその言葉を聞いている。二人の間には花瓶に挿された二本の紅い薔薇がある。ワインと同じ色の薔薇が。しかしその薔薇も目には入っていないかった。ただそこにあるだけであった。二人に顔を向けて。

「私も気付かなかったけれど」

「そうだったんだ」

「偶然見て。今確かめたけれど」

「済まないな」

「いいの」

けれど女はそれは許した。

「私も。ずっと忙しくて会えなかったから。いえ」

言うのだった。言えなかった言葉を。

「会いたくはなかったのね。貴方に」

「俺にか」

「擦れ違いが続いていたから。だから」

今までは言えなかったのに今はそれが言葉になる。それは終わりがもうすぐそこまで来ているからだというのが自分でもわかっていった。

「こうなってしまったのね」

「さよならだよな」

男は言った。

「これで」

「そうね。ここで終わりね」

女もその言葉を受けて言う。

「何もかもがここで」

「あのチークが終わったら」

男は不意に店の真ん中に顔を向けた。そこではピアノでチークが奏でられカップルが踊っていた。かつては二人もあそこで踊った。懐かしい場所だった。

「お別れだな」

「ええ。そうしましょう」

こくりと頷く。その時はもう近付いていた。

「けれどさ」

彼はここでワインのボトルを手にして声をかけてきた。

第二章

「最後に」

「これが最後のワインね」

「ああ。俺が入れるな」

残念そうな微笑みだった。自分が悪いのにそんな笑みになるのは勝手だとわかっていたが。それでもその笑みになってしまった。

「それでいいよな」

「御願いするわ」

女も寂しい笑みで応えてみせた。

「最後にね」

「それが飲み終わる頃にはチークも終わるさ」

彼は言う。

「何もかも」

「不思議ね」

女も言う。寂しげな笑みのままで。

「あんなに熱かったのに。急に冷たくなって」

「何もかもな」

「ねえ」

女はまた声をかけた。

「今はこうなってしまったけれど。次に生まれ変わって一緒になったら」

「その時はまたな」

もうボトルの中のワインはなくなってしまった。彼女に注いだので全ては終わりだった。

「こんなことにだけはならないようにしような」

「今更言っても無駄だけれど」

「仕方ないさ」

全てはそれだけだった。何もかもが。

「俺達が馬鹿だったから」

「馬鹿だからそうなって」

寂しい笑みが消えて。悲しい笑みになっていた。

「何もかもが駄目になって」

「それもこれも全部終わって」

二人はそう言葉を紡ぎ合わせて。それも最後なのがわかっていたが。

「それじゃあな」

「ええ」

もうすぐチークが終わろうとしていた。女はそれを見ながらグラスの中のワインを飲んだ。それを飲み干した時にチークは終わった。店の中で拍手が聴こえてくる。しかし薔薇が飾られた席にはいるのは薔薇だけになっていた。他には誰もいなくなっていた。

チークの後は変な不協和音めいたノイズの様な音楽が奏でられた。その不協和音がはじまるのを聴くのも薔薇達だけだった。恋の終わりを見届けた薔薇達はワインの残り香の中で静かにそこに咲いていた。何事も終わった舞台の中央で。

One more glass of Red wine 完

2007・10・12

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0431e/>

One more glass of Red wine

2010年10月9日11時39分発行